令和6年度

国　語

（解答用紙は別紙としてこの冊子にはさんであります）

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私に親しいある老科学者がある日私に次のようなことを語って聞かせた。

「科学者になるには『あたま』がよくなくてはいけない」これは普通世人の口にする一つの命題である。

頭の悪い人は、頭のいい人が考えて、はじめからだめにきまっているような試みを、一生ケンメイ(a)につづけている。やっと、それ①がだめとわかるころには、しかしたいてい何かしらだめでない他のものの糸口を取り上げている。そうしてそれは、そのはじめからだめな試みをあえてしなかった人には決して手に触れる機会のないような糸口である場合も少なくない。自然は書卓②※1の前で手をつかねて空中に絵を描いている人からは逃げ出して、自然のまん中へ赤裸で飛び込んで来る人にのみそのシンピ(b)の扉を開いて見せるからである。

頭のいい人には恋ができない。恋は盲目③である。科学者になるには自然を恋人としなければならない。自然はやはりその恋人にのみ真心を打ち明けるものである。

科学の歴史はある意味では錯覚(c)と失策の歴史である。偉大なる迂愚者※2の頭の悪い能率の悪い仕事の歴史である。

頭のいい人は批評家に適するが行為の人にはなりにくい。すべての行為には危険が伴なうからである。けがを恐れる人は大工にはなれない。失敗をこわがる人は科学者にはなれない。科学もやはり頭④の悪い命知らずの死骸の山の上に築かれた殿堂であり、血の川のほとりに咲いた花園である。一身の利害に対して頭がよい人は戦士にはなりにくい。

頭のいい人には他人の仕事のあらが目につきやすい。その結果として自然に他人のする事が愚かに見え従って自分がだれよりも賢(d)いというような錯覚に陥りやすい。そうなると自然の結果として自分の向上心にゆるみが出て、やがてその人の進歩が止まってしまう。頭の悪い人には他人の仕事がたいていみんな立派に見えると同時にまたえらい人の仕事でも自分にもできそうな気がするのでおのずから自分の向上心を刺激されるということもあるのである。

頭のいい人で人の仕事のあらはわかるが自分の仕事のあらは見えないという程度の人がある。そういう人は人の仕事をくさしながら⑤も自分で何かしら仕事をして、そうして学界にいくぶんの貢献(e)をする。しかしもういっそう頭がよくて、自分の仕事のあらも見えるという人がある。そういう人になると、どこまで研究しても結末がつかない。それで結局研究の結果をまとめないで終わる。すなわち何もしなかったのと、実証的※3な見地からは同等になる。そういう人はなんでもわかっているが、ただ「人間は過誤の動物である」という事実だけを忘却しているのである。一方ではまた、大小方円の見さかいもつかないほどに頭が悪いおかげで大胆な実験をし大胆な理論を公にしその結果として百の間違いの内に一つ二つの真を見つけ出して学界に何がしかの貢献をし、また誤って

大家の名を博する事さえある。しかし科学の世界ではすべての間違いは泡沫※4のように消えて真なもののみが生き残る。それで何もしない人よりは何かした人のほうが科学に貢献するわけである。

頭のいい学者はまた、何か思いついた仕事があった場合にでも、その仕事が結果の価値という点から見るとせっかく骨を折っても結局たいした重要なものになりそうもないという見込みをつけて着手しないで終わる場合が多い。しかし頭の悪い学者はそんな見込みが立たないために、人からはきわめてつまらないと思われる事でもなんでもがむしゃらに仕事に取りついてわき目もふらずに進行して行く。そうしているうちに、初めには予期しなかったような重大な結果にぶつかる機会も決して少なくはない。この場合にも頭のいい人は人間の頭の力を買いかぶって⑥天然の無際限な奥行きを忘却するのである。科学的研究の結果の価値はそれが現われるまではたいていだれにもわからない。また、結果が出た時にはだれも認めなかった価値が十年百年の後に初めて認められることも珍しくはない。

頭がよくて、そうして、自分を頭がいいと思い利口だと思う人は先生にはなれても科学者にはなれない。人間の頭の力の限界を自覚して大自然の前に愚かな赤裸⑦の自分を投げ出し、そうしてただ大自然の直接の教えにのみ傾聴※5するカクゴ(f)があって、初めて科学者にはなれるのである。しかしそれだけでは科学者にはなれない事ももちろんである。やはり観察と分析と推理の正確周到を必要とするのは言うまでもないことである。

つまり、頭⑧が悪いと同時に頭がよくなくてはならないのである。

この事実に対する認識の不足が、科学の正常なる進歩を阻害する場合がしばしばある。これは科学にたずさわるほどの人々の慎重な省察※6を要することと思われる。

（出典『科学者とあたま』寺田寅彦　著）

※1 書卓 ―― 書き物をする机
※2 迂愚者 ―― ぼんやりしていて世の中のことにうとい人
※3 実証的 ―― 経験した事実によって研究し、証明すること
※4 泡沫 ―― あわ
※5 傾聴 ―― 気持ちを集中して熱心に聞く
※6 省察 ―― 自分をかえりみてよく考えること

問一　――線部ⓐ～ⓕのカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直し、それぞれ解答欄に答えなさい。

問二　――線部①「それ」の指す内容を本文中から二十字以内で抜き出して、解答欄に答えなさい。

問三　――線部②とはどのような人ですか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア　自然に直接に接することなく、頭の中であれこれ考えている人。
イ　書斎にこもって、ひたすら書物の中から知識を求めている人。
ウ　自然をしっかり見ることをせず、空想で絵を描いている人。
エ　自然を理解することができず、なんとなく遊びほうけている人。

問四　――線部③「恋は盲目」と似たような意味を持つことわざを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

【　ア　時は金なり　　イ　花より団子　　ウ　あばたもえくぼ　　エ　猿も木から落ちる　】

問五　――線部④とは具体的にいうとどういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア　失敗を繰り返した人と違い、正しい道を選んで得られた成功。
イ　無数の失敗の上に初めて得られた、大きな成果。
ウ　危険をおかした人たちの失敗と、慎重に道を選んだ人の成功。
エ　無数の危険をかえりみない行為の、最終的な成果。

問六　――線部⑤「くさしながら」の意味として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

【　ア　無視しつつ　　イ　批評しながら　　ウ　軽蔑したまま　　エ　悪く言いながら　】

問七　――線部⑥「天然の無際限な奥行き」とは、どのようなことですか。三十字程度で解答欄に答えなさい。

問八　――線部⑦「赤裸」について、ここではどのような意味として用いられていますか。最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア　自分が頭がいいとか悪いとかに、いっさいとらわれないこと。
イ　先入観や自分なりの予感などをいっさいもたないこと。
ウ　自分の頭の悪さを少しも恥じることがないこと。
エ　仕事に成功して名をあげようというような心のないこと。

問九　――線部⑧「頭が悪い」とありますが、作者はなぜ「頭が悪い」ことが必要だといっているのですか。六十字程度で解答欄に答えなさい。

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

大きな樹。卵形の葉は、風が吹くとサワサワと優しい音を奏(ⓐ)でる。息を吸い込むと、緑の香りが胸いっぱいに満ちてくる。

千穂は足の向きを変え、細い道を上る。どうしても、あの樹が見たくなったのだ。塾の時間が迫っていたけれど、ガマン(ⓑ)できなかった。ふいに鼻腔をくすぐった緑の香りが自分を誘っているように感じる。大樹が呼んでいるような気がする。

①だけど、まだ、あるだろうか。とっくに切られちゃったかもしれない。切られてしまって、何もないかもしれない。

心が揺れる。ドキドキする。

「あっ！」

叫んでいた。大樹はあった。四方に枝を伸ばし、緑の葉を茂らせて立っていた。昔と同じだった。何も変わっていない。周りに設けられた囲いはぼろぼろになって、地面に倒れている。だけど、大樹はそのままだ。

千穂はカバンを放り出し、スニーカーを脱ぐと、太い幹(ⓒ)に手をかけた。あちこちに小さな洞やコブがある。登るのは簡単だった。

まん中あたり、②千穂の腕ぐらいの太さの枝がにゅっと伸びている。足を滑らせた枝だろうか。よくわからない。枝に腰かけると、眼下(ⓓ)に街が見渡せた。金色の風景だ。光で織った薄い布を街全部にふわりとかぶせたような金色の風景。そして、緑の香り。

そうだ、そうだ、こんな風景を眺めるたびに、胸がドキドキした。この香りを嗅ぐたびに幸せな気持ちになった。そして思ったのだ。

あたし、絵を描く人になりたい。

理屈じゃなかった。描きたいという気持ちが突き上げてきて、千穂の胸を強く叩いたのだ。そして今も思った。

描きたいなあ。

今、見ている[※1]美しい風景をカンバスに写し取りたい。

画家なんて大仰なものでなくていい。絵を描くことに関わる仕事がしたかった。芸術科のある高校に行きたい。けれど母の美千恵には言い出せなかった。

母からは、開業医の父の跡をツぐ(ⓔ)ために、医系コースのある進学校を受験するように言われていた。祖父も曽祖父も医者だったから、一人娘の千穂が医者を目ざすのは当然だと考えているのだ。芸術科なんてとんでもない話だろう。

絵描きになりたい？　千穂、あなた、③何を考えてるの。絵を描くのならシュミ(ⓕ)程度にしときなさい。夢みたいなこと言わないの。

そう、一笑に付されるにちがいない。大きく、深く、ため息をつく。

お母さんはあたしの気持ちなんかわからない。わかろうとしない。なんでもかんでも押しつけて……あたし、ロボットじゃないのに。

［　A　］葉が揺れた。

そうかな。

かすかな声が聞こえた。聞こえたような気がした。耳を澄ます。

そうかな、そうかな、本当にそうかな。

そうよ。お母さんは、あたしのことなんかこれっぽっちも考えてくれなくて、命令ばかりするの。

そうかな、そうかな、よく思い出してごらん。

緑の香りが強くなる。頭の中に記憶がきらめく。

千穂が枝から落ちたと聞いて美千恵は、④血相をかえてとんできた。そして、泣きながら千穂を抱きしめたのだ。

「千穂、千穂、無事だったのね。よかった、よかった。生きていてよかった」

美千恵は［　B　］涙をこぼし、「よかったよかった」と何度も繰り返した。

「だいじな、だいじな私の千穂」そうも言った。母の胸に抱かれ、その温かさを感じながら、千穂も「ごめんなさい」を繰り返した。ごめんなさい、お母さん。ありがとう、お母さん。

思い出したかい？

うん、思い出した。

そうだった。この樹の下で、あたしはお母さんに抱きしめられたんだ。しっかりと抱きしめられた。

緑の香りを吸い込む。

これから家に帰り、ちゃんと話そう。⑤あたしはどう生きたいのか、お母さんに伝えよう。ちゃんと伝えられる自信がなくて、ぶつかるのが怖くて、お母さんのせいにして逃げていた。そんなこと、もうやめよう。お母さんに、あたしの夢を聞いてもらうんだ。あたしの意志であたしの未来を決めるんだ。

大樹の幹をそっとなでる。

ありがとう。⑥思い出させてくれてありがとう。

樹はもう何も言わなかった。

風が吹き、緑の香りがひときわ、濃くなった。千穂はもう一度、深くその香りを吸い込んでみた。

（出典　『みどり色の記憶』　あさのあつこ　著）

※1　大仰な ―― おおげさな

問一　――線部ⓐ～ⓕのカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直し、それぞれ解答欄に答えなさい。

問二　A ・ B に入る適当な語を次の中から選び、それぞれ解答欄に記号で答えなさい。

【 ア　ぼろぼろと　　イ　だらだらと　　ウ　しんしんと　　エ　ざわざわと 】

問三　――線部①「心が揺れる。ドキドキする。」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア　探し求めている大樹が今も昔のままあるかどうかわからずに不安だから。
イ　小さい頃によく木登りをしていた大樹に再び登ることができるから。
ウ　思い出の大樹がすでになくなっていると思っていたのに今も存在していたから。
エ　久しぶりに大樹に登ろうかどうしようかに悩み結論を下せずにいたから。

問四　――線部②「光で織った薄い布を街全部にふわりとかぶせたような金色の風景」という描写から想像される風景として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア　地平線からちょうど太陽が昇る早朝。
イ　照りつける日差しが強烈な昼間。
ウ　沈みゆく太陽が街をおおう夕方。
エ　一面ライトアップされた夜間。

問五　――線部③「大きく、深く、ため息をつく。」とありますが、それはなぜですか。その理由として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア　これまで母親の言うとおりに生活してきたが、次第に息苦しく感じるようになったから。
イ　母親が、千穂の気持ちを理解しようとせず話し合おうとしても相手にしてくれないから。
ウ　自分の夢を頑固な母親にどのように伝えようかと焦る自分を落ち着かせようとしているから。
エ　母親からの拘束が強く、自分の思うとおりに行動させてもらえずに苛立ちを感じているから。

問六　――線部④「血相をかえて」とありますが、本文中での意味として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア　悲しみに涙を浮かべながら
イ　極度の緊張に顔を真っ赤にして
ウ　ショックで顔の色が青ざめて
エ　あまりの驚きに顔色を変えて

問七　――線部⑤とありますが、千穂はお母さんにどのようなことを伝えようとしていますか。四十五字程度で解答欄に答えなさい。

問八　――線部⑥「思い出させてくれてありがとう。」とありますが、どのようなことを思い出したのですか。その内容を五十字程度で解答欄に答えなさい。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある川のほとりに、蟻遊ぶことありけり。〈遊んでいた〉①にはかに水かさ増さりきて、〈水量が〉かの蟻をさそひ流る。浮きぬ沈みぬするところに、②鳩こずゑよりこれを見て、〈気の毒な様子だなあ〉「あはれなるありさまかな。」と、ⓐこずゑをちと食ひ切つて川の中に落としければ、蟻これに乗つて渚に上がりぬ。〈河岸に上がった〉かかりけるところに、〈こうしたところに、〉ある人、竿の先に鳥もちを付けて、かの鳩をささむとす。〈捕らえようとする〉蟻心にⓑ思ふやう、〈返したいものだ〉③「ただ今の恩を送らむものを。」と思ひ、かの人の足にしつかと食ひつきければ、おびえあがつて、竿をかしこに投げ捨てけり。〈その場に〉そのものの色や知る。〈このいきさつを知っただろうか、いや、知りはしまい〉しかるに、④鳩これを悟りて、〈どこへともなく〉いづくともなく飛び去りぬ。〈このように〉そのごとく、⑤人の恩を受けたらむ者は、〈どんな形でも〉いかさまにもその報ひをせばやと思ふ志を持つべし。〈したいと思う気持ち〉

（出典『伊曾保物語』）

問一 ── 線部ⓐⓑの語の読みを現代かなづかいのひらがなに直し、それぞれ解答欄に答えなさい。

問二 ── 線部①「にはかに」の語の意味を解答欄に答えなさい。

問三 ── 線部②の「これ」は蟻のどのような様子を指していますか。次の中から最も適当なものを選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア 蟻が川のほとりでのんびり遊んでいる様子。
イ 蟻が水に流されて浮いたり沈んだりしている様子。
ウ 蟻が川を流れる葉っぱに乗って遊んでいる様子。
エ 蟻が川の増水におびえて震えている様子。

問四 ── 線部③「ただ今の恩」とありますが、誰が誰に受けた恩ですか。それについて述べた次の文の［A］・［B］に入る語をそれぞれ本文中より一字で探し、解答欄に答えなさい。

［A］が［B］に受けた恩。

問五 ── 線部④「鳩これを悟りて」とありますが、「これ」について説明したものとして最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア ある人が自分を狙っていたこと。
イ ある川で蟻が遊んでいたこと
ウ 自分が渚に上がっていったこと。
エ 鳩がつい先ほど蟻を助けたこと。

問六 ── 線部⑤は作者が感想を述べた部分です。作者が伝えようとしている教訓を四十字程度でまとめ、解答欄に答えなさい。

令和6年度

国語　解答用紙

【一】

問一
ⓐ ケンメイ ＝
ⓑ シンピ ＝
ⓒ 錯覚 ＝
ⓓ 賢い ＝
ⓔ 貢献 ＝
ⓕ カクゴ ＝

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

【二】

問一
ⓐ 奏でる ＝
ⓑ ガマン ＝
ⓒ 幹 ＝
ⓓ 眼下 ＝
ⓔ ツぐ ＝
ⓕ シュミ ＝

問二
A
B

問三

問四

問五

問六

問七

問八

【三】

問一
ⓐ
ⓑ

問二

問三

問四
A
B

問五

問六

受験番号

氏　名